

**スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究
- 障害者スポーツイベントのボランティアに着目して -**

**An Empirical Study on Sports Volunteers
- Observations on the motivations of Volunteers at Events -**

松本耕二

山口県立大学社会福祉学部

Koji MATSUMOTO

Faculty of Social Welfare, Yamaguchi Prefectural University

Summary

The purpose of this study was to empirically classify volunteers at sports events by types of motivation. Data for the study was collected by questionnaire. The sample consisted of 466 volunteers who participated in an international wheel chair marathon which was held for two days in November, 1996. Factor analysis was performed to identify the factor structure underlying the motivations for volunteering. Based on the results of factor analysis, the sample was classified by cluster analysis.

The main results were as follows:

1. Many of the samples were single (70.8%), women (62.7%) and students (52.3%) of a young age group of 10-20 years old (69.3%).
2. Factors underlying volunteer motivations were identified and named: (1)voluntarism, (2)self growth, (3)learning skills, (4)recreation, (5)community participation, (6)heteronomous participation, (7)reward and (8)communication & support to participants.
3. The sample was clustered into four types and named: (1)voluntary contribution type (52.8%), (2)heteronomous and compensation type (23.8%), (3)independent recreation type (18.7%) and (4)obligatory participation type (4.7%).
4. In regards to "independent recreation type", samples were characterized as single (87.4%) and women (87.3%) of a young age group of 10-20 years old (82.8%). Regarding "obligatory participation type", samples were characterized as married (45.5%), men (63.6%) and employees of companies (59.1%).

．はじめに

今日、我が国のボランティア活動は、自由時間の増大や高齢化社会の到来によって高齢者、障害者等を対象とした社会福祉領域をはじめ、公民館や青少年教育施設等の社会教育領域、さらにNGOによる国際協力など様々な領域において展開され、その活動内容も多岐にわたっている。ボランティア人口は毎年増加傾向にあり、全国社会福祉協議会把握のボランティア登録者数は1997年4月現在、約545万人、7万9000団体にも達している。「ボランティア」と呼ばれる多くの活動参加者は地域社会が直面する問題の解決や予防、また地域や社会の向上・発展を目指しており労力やサービスを無償で提供している。

わが国におけるボランティア活動に関する調査は、総理府¹⁷⁾をはじめ、総務庁⁴⁾、文部省の政府機関やシンクタンク²³⁾等による大規模な調査が実施され、およそ3割が活動参加経験者であることなど活動参加者の実態⁶⁾が明らかになりつつある。しかし調査研究での「ボランティア活動」については一般に自発性、無償性、社会性、先駆性などの要素があげられるが統一的な定義表現が難しく個々の行為がボランティア活動に該当するかどうか判断する場面になると個人による認識に差異が生じることが少なくなく調査結果に少なからず影響を及ぼしていること⁶⁾が懸念されており、日本のボランティア観についての問題も提起されている。

ところで、近年、スポーツ界においても国内で世界大会クラスのビッグイベントが次々と開催され、先の長野オリンピックでは3万2千人が、またその後のパラリンピックでも3千人以上のボランティアが参加し、大会を成功に導いた大きな力であった。またビッグイベントに限らず地域のスポーツ少年団やスポーツ大会などにも無償で自発的に参加し活動をサポートするボランティアは、運営面において不可欠な存在であることは言うまでもない。このようなスポーツ推進のために行う活動に参加したボランティアをSSF⁵⁾は「スポーツ・ボランティア」と定義し、活動内容により非日常空間で不定期的に活動する「イベント・ボランティア」と日常空間で定期的に活動する「コミュニティ・ボランティア」とに活動の日常性を基に分類している。また山口²⁴⁾は「スポーツボランティアは、個人の自由意志に基づき、その知識・技能や時間などを進んで提供し、社会に貢献することであり、地域のスポーツ指導者、福祉（障害者・高齢者など）スポーツへの支援、スポーツイベントへの支援などのスポーツへのボランティア活動と、スポーツ選手やスポーツ団体などによるスポーツ教室、福祉活動などの、スポーツからのボランティア活動に区分される。」とし活動参加者の質的要素によって分類、定義している。スポーツライフ・データ1998²²⁾によると、過去1年間にスポーツに関わるボランティア活動に参加したことがあるスポーツボランティア経験者は約7%で、その過半数がイベントボランティアであったことが報告されている。

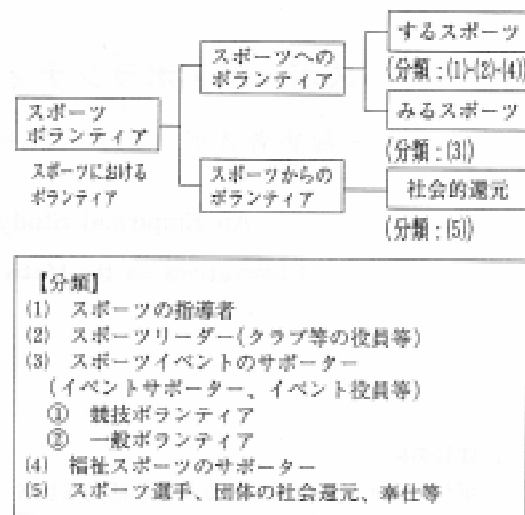


図1 スポーツボランティアの分類

これまでのスポーツ・ボランティアに関する調査研究は、長ヶ原¹³⁾をはじめとし、イベント・ボランティアを対象とした実証的研究報告^{2), 3), 7), 9), 16)}少なからずみられる。しかしながら前述したボランティアの定義やサンプリングの問題から事例的調査が大半を占める。しかしながらこれらの研究から参加動機^{2), 7)}、活動期待・満足⁹⁾、継続意欲^{13), 16)}、情報

入手³⁾等、多くの知見が得られ、スポーツ・ボランティアの実態が明らかにされつつある。

今日の複雑多岐にわたるボランティア活動のなか、どのような意識や特性を持った人々がスポーツイベントに参加しているのか心理的な側面からのアプローチを試みたいと思い研究に着手した。

本研究では、近年のボランティア活動の大衆性から、特にスポーツ領域におけるイベント・ボランティアへの参加動機に焦点をあて、その構造を探索的に明らかにし、多様化するボランティアの類型化を試みることを目的とした。

．研究方法

1．調査対象

本研究の調査対象者は、1996年11月に開催された国際的な障害者スポーツイベント(車椅子マラソン大会：以後、大会とする。)へ参加したボランティアである。大会は2日間あり、初日に健康診断や開会式などの歓迎式典が開催され2日目に競技(フル、ハーフ・マラソン)が行われた。

なお本研究での「ボランティア」とは大会事務局にボランティアとして登録され、2日間の大会中の活動に参加した人とした。

山口²⁴⁾は「スポーツボランティア」を図1のように「スポーツへのボランティア」と「スポーツからのボランティア」とに分類している。この分類に従うと本研究のボランティアは、スポーツ活動に参加する「スポーツへのボランティア」で、非日常的なイベントへの参加者であることから「みるスポーツ」のボランティアと言うことになる。活動参加に際しスポーツの専門性を有する必要はなく、障害者の国際スポーツ大会を支えるボランティアで大会運営に関する活動に参画している。活動内容は、選手補助(通訳や介助等)、交通整理、運搬、事務補助(受付・登録やビラの配布等)、会場設営、清掃等、多岐にわたっている。

2．調査期間

1996年11月～12月の2ヶ月間である。

3．調査方法

本調査は、質問紙による調査で、郵送法および留置法と直接手渡し法の併用によって実施し、配布・回収した。

調査の実施は、大会事務局よりボランティア参加者名簿を入手し、大会前に名簿をもとに活動参加団体宛および個人宛に調査協力を依頼、そして承諾の得られた団体および個人に調査票を配布した。その結果、466名の有効回答を得た(有効回収率54.8%)。

4．調査内容

本研究では、個人的属性(9項目)、大会関連(8項目)、参加満足・継続意識(10項目)、参加動機(64項目)、日常活動(15項目)、5要因106項目により構成されている。

参加動機項目は、先行研究^{2), 12), 18), 19)}等を検討し、最終的に64項目を作成した。尺度には「5.あてはまる」から「1.あてはまらない」のリッカートタイプ5段階評定尺度を用いている。

5．データの分析

参加動機項目の数量化にあたっては「5.あてはまる」から「1.あてはまらない」の素点をそのまま等間隔尺度を構成するものと仮定し、参加動機の構造把握のために因子分析を用いて参加動機因子の抽出を行った。次に参加動機の類型化を試みるために、各サンプルごとに因子得点を算出しワード法によるクラスター分析を行い各クラスター項目ごとにクロス集計を施した。

・結果と考察

1. サンプルの属性

本研究のサンプルの属性は表1に示している。性別では女性が6割強を占めている。年齢では10歳代が40.8%、20歳代が28.5%と青少年層で全体のおよそ7割であった。また学歴は、高校卒が44.8%と最も多く、ついで中学校卒26.2%、4年制大卒、短大・高専卒、専門学校卒と続いた。居住地についてみると県内が8割と大半を占めるが、県外からの参加も2割弱みられた。職業では、生徒・学生が5割と最も多く、次いで会社員が4割弱みられる。

このようなことから本サンプルでは、若い年齢層の未婚の女性が多いことが特徴といえる。ボランティア活動への関心は男性よりも女性の方が高いことが報告されており¹⁷⁾、スポーツイベントのボランティア調査においても比較的若い世代の女性の参加率が高いとする先行研究^{2), 3), 7), 9), 13), 16)}に追従するものであった。特に本サ

ンプルでは「障害者」のスポーツイベントであること、年一回数日間の一過的なイベントであること、さらに専門的知識や技術を要しない活動が比較的多く、参加し易い内容であること等が、ボランティア活動に関心のある比較的若い世代の参加者に受け入れられているといえよう。

2. 参加動機の因子構造

次にサンプルの参加動機構造を把握するために、参加動機64項目を因子分析(バリマックス直行回転)し、固有値が1.0以上の因子を抽出を試みた。その結果、表2にみられるように8因子を抽出した。累積寄与率は49%で全分散の5割を説明している。これら8因子を因子負荷量の大きさによって検討、解釈することにより、順に、ボランティア、自己成長、技術習得・発揮、レクリエーション、社会参加、他律参加、報酬、参加者交流支援とそれぞれ命名することにした。

第1因子は、人の役に立ちたい、貢献したいなどとする愛他的項目と、ボランティア活動に対する興味や関心、必要性といった内発的で、活動への積極的な姿勢を示す内容が中心的な動機としてまとめられることから「ボランティア」と命名した。第2因子は、自分自身の再発見、社会的な視野を広げる、人生を有意義にしたいなどとした活動者自身の人間的成長を望む動機と解釈できるため「自己成長」とした。第3因子は、技術や技能が得られるや仕事に関係する知識や技術を得たいとする技術・技能の習得と、知識や経験を生かし活動参加者自信が持っている技術・技能の発揮を主体とした因子であり、さらに他のボランティアとの交流や出会いを通して情報の収集・交換をも望んでいる項目をみるこ

表1. サンプルの属性

属性	n	%
性別		
男性	174	37.3
女性	292	62.7
年齢		
10歳代	190	40.8
20歳代	133	28.5
30歳代	59	12.7
40歳代	49	10.5
50歳以上	35	7.5
婚姻		
未婚	330	70.8
既婚	136	29.2
居住地		
県内	390	83.7
県外	76	16.3
職業		
生徒・学生	244	52.3
会社員	172	36.9
公務員	12	2.6
団体職員	11	2.4
主婦	15	3.2
その他	12	2.6
学歴		
中学校卒	122	26.2
高校卒	209	44.8
専門学校卒	12	2.6
短大・高専卒	45	9.7
大学卒(大学院修了含む)	78	16.7

就学中の学歴は含めていない。

ができる。このことから「技術習得・発揮」と命名した。第4因子には、気分転換やリラ

表2. 参加動機因子分析結果(主因子、バリマックス回転、固有値1.0以上)

参加動機因子	固有値(累積寄与率)	因子負荷量	Cronback's
第1因子 【ボランティア】	15.84 (24.8)		.865
他の人の役に立ちたいから		.732	
何らかの活動に貢献したいから		.681	
人から喜んでもらえたり感謝されるような活動がしたいから		.661	
ボランティア活動に興味があるから		.576	
ボランティア活動に関わっていたいから		.534	
活動を通して地域社会の役に立ちたいから		.529	
ボランティアの必要性を感じたから		.518	
活動内容に興味があるから		.474	
第2因子 【自己成長】	6.31 (34.6)		.884
自分自身が成長したいから		.728	
新しい自分を再発見したいから		.722	
社会的な視野を広げるために重要だから		.622	
人生を意義あるものにしたいから		.472	
何事にも挑戦してみたいから		.467	
自分自身のためになるから		.464	
新しい知識や経験を得たいから		.443	
第3因子 【技術習得・発揮】	2.75 (38.9)		.850
身につく技術や技能が得られるから		.673	
自分の持っている技術・技能を発揮できるから		.641	
自分の知識や経験を生かしたいから		.638	
仕事に関係する知識や技術を得たいから		.616	
いろいろな人と出会いたいから		.455	
日常の仕事に張り合いを与えてくれるから		.420	
他のボランティアと交流する機会が得られるから		.365	
第4因子 【レクリエーション】	1.70 (41.6)		.832
気分転換になるから		.752	
リラックスする機会が得られるから		.714	
ストレス解消になるから		.685	
退屈から逃れたいから		.626	
余暇時間を有効に過ごしたいから		.454	
日常生活に変化を持たせたいから		.446	
活動を通して自分を表現できるから		.429	
第5因子 【社会参加】	1.45 (43.9)		.802
ボランティアの必要性を他の人に理解してもらいたいから		.596	
社会の一員として当然と思ったから		.553	
地域の活性化に関心があるから		.521	
大会の運営に役立ちたいから		.436	
仲間との連帯感を得たいから		.412	
大会を盛り上げたいから		.390	
活動を通して他の人を指導・教育したいから		.386	
自分が必要であると感じているから		.327	
第6因子 【他律参加】	1.25 (45.8)		.780
会社や学校、地域団体で参加することになったから		.732	
学校や会社、地域団体などの仲間が参加するから		.663	
知人や友人に強く頼まれたから		.613	
仕事柄(立場上)仕方ないから		.588	
大会側から依頼されたから		.497	
活動への参加に義務感を感じたから		.445	
知人・友人に誘われたから		.372	
第7因子 【報酬】	1.16 (47.6)		.753
金銭的報酬があるから		.626	
他の人から認められたいから		.577	
記念品がもらえるから		.548	
何らかの報酬を得たいから		.531	
日常生活の抑圧や責任から逃れられるから		.493	
第8因子 【参加者交流支援】	1.08 (49.3)		.837
参加者(選手)と交流することができるから		.526	
参加者(選手)との気持ちを共感したいから		.489	
参加者(選手)の心の支えになりたいから		.465	
参加者(選手)の活動を支援したいから		.464	

ックス、ストレス解消など余暇時間を通して非日常的な活動への参加により、精神的ストレスを解消したいとする項目がみられるため「レクリエーション」とした。第5因子は、ボランティアの必要性理解や社会の一員として、さらには開催地域の活性化、大会運営への貢献とした社会的活動への参加や貢献が主な動機としてまとまっているので「社会参加」と命名した。第6因子は、会社や学校、地域団体など所属団体での参加やその仲間との参加、友人や知人、大会側からの勧誘や依頼、義務感を感じてなど、消極的かつ受動的、他律的な活動への参加を示唆しているため「他律参加」と命名した。第7因子では、金銭的報酬や他人から認められること、また抑圧から逃れられるとした精神的見返りなど、何らかの報酬が得られる項目が主であることから「報酬」と命名した。最後の第8因子では、参加者（選手）との交流や気持ちの共感、また活動支援など、参加者（選手）を対象とした因子と解釈できる。このことから「参加者交流支援」とした。

各参加動機因子の安定性（あるいは内部整合性）については、信頼性係数クロンバックの値を用いて算出した。その結果、全ての因子において $\alpha = 0.75$ 以上であったことから、本研究で得た因子解が全体的に安定した構造になっているといえよう。

これらボランティアの参加動機について、野上²⁰⁾は「他者志向的動機」と「自己志向的動機」に、また長ヶ原ら¹³⁾は「社会的ボランティア動機」と「個人的ボランティア動機」に分類している。Henderson¹⁹⁾は「愛他的動機」と「個人的動機」とに二分し、個人的動機には「親和」、「達成」、「権力」の3要因に分類し分析した結果、前者の愛他的動機が7割を越え支持され、個人的動機では親和動機が9割をしめたことを報告している。ボランティアの参加動機では愛他的動機が主要な因子であり^{2), 13)}、本結果でも愛他的動機とも解釈される「ボランティア因子」が最も高い動機因子として24.8%の寄与率を占めている。また個人的動機にあたる「自己成長」、「技術習得・発揮」因子などは、サンプルが比較的若い年齢層であることから、活動を通して何らかの教示を得たいとする欲求の現れ¹²⁾とも推察できよう。また因子中に、ボランティアの理念に反して自主的・自発的ではない「他律参加」や物（金銭）的もしくは精神的な「報酬」を求めている参加動機が抽出された。これらは特に本大会のようなイベントでは運営側から各団体組織へ人的援助を依頼・依頼されることによって団体の構成員が動員もしくは半ば強制参加せざるを得ない状況での参加が少なからずあること、また活動参加者が物的、精神的な報酬を期待しているあらわれといえる。

3. ボランティアの類型化

次に、どのような参加動機の特徴を持ったボランティアが存在するかを明らかにするために各サンプルごとの因子得点を算出し、参加動機による類型化を試み

表3. クラスタ分析結果

	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	第4クラスター
n (%)	246(52.8)	111(23.8)	87(18.7)	22(4.7)

た。表3にはクラスタ分析により類型化された分析結果を示している。抽出された4つのクラスターの割合は、第1クラスターが最も多く52.8%、逆に最も少ない第4クラスターは全サンプルの4.7%であった。

また、クラスター・グループごとの各因子得点の平均値を表4に示している。この参加動機因子得点の結果から各クラスターの特徴をまとめると次のようである。

まず、第1クラスターは「ボランティア」、「参加者交流支援」、「社会参加」の因子での得点が高く、「レクリエーション」、「他律参加」、「報酬」の因子が負の得点を示してい

表4 . クラスター・グループごとの標準化因子得点

参加動機因子	第1クラスター 自発的貢献	第2クラスター 他律対価	第3クラスター 主体的レク	第4クラスター 義務的参加	F 値	Prob.
ボランティア	0.36	-0.52	0.01	-1.55	51.85	***
自己成長	0.15	-0.38	0.57	-2.06	69.72	***
技術取得交流	0.08	-0.03	0.17	-1.46	19.31	***
レクリエーション	-0.38	0.37	0.85	-0.97	64.43	***
社会参加	0.24	0.06	-0.46	-1.25	26.66	***
他律参加	-0.32	0.92	-0.60	1.40	112.53	***
報酬	-0.18	0.43	0.02	-0.25	10.85	***
参加者交流支援	0.28	-0.49	0.18	-1.39	38.43	***

*** p<0.001

る。すなわち、参加（選手）者や大会、地域社会への参加や興味・関心が旺盛で、活動への積極的、能動的な参加であり、気晴らし、他律・受動的で報酬を目的としたグループではないことがうかがえる。内発的な動機による社会参加を主目的としたグループで「自発的貢献型」として解釈できよう。

第2クラスターでは、「他律参加」、「報酬」、「レクリエーション」の因子での得点が高く、「ボランティア」、「参加者交流支援」、「自己成長」においては低い因子得点であった。気晴らしを含めた他律・消極的参加ではあるが、活動参加に対し何らかの報酬を求めている「他律対価型」のグループと解釈される。

第3クラスターは、「レクリエーション」、「自己成長」の因子得点が高く、「他律参加」、「社会参加」の2因子で負の得点を示している。これは、主体的な参加ではあるものの社会的参加・貢献に関心はなく、余暇時間を有効に利用し自分自身の気晴らしや、自己の成長を主目的としたグループと察することができよう。活動参加に際し、レクリエーションを兼ねた主体的な参加者で「主体的レクリエーション型」といえよう。

第4クラスターは、「他律参加」因子のみが正の値を示し、その他7因子全てが負の得点で非常に低い値を示した。従って会社や学校、地域団体等の所属団体や友人・知人による他律的、半ば義務的な参加であることが伺える。従って「義務的参加型」のグループと解釈できる。

このように、ボランティアは参加動機によって4つのグループに類型化された。これら5つのグループは、それぞれ特徴的な参加動機因子を示している。さらにF検定の結果、8因子すべてにおいて1%水準で有意差が認められ、参加動機によるボランティアの類型化の有用性が示唆された。

4 . 各クラスターの個人的特性

次に、参加動機によって類型化された各クラスターの属性を把握するために、クロス分析により明らかにする。各クラスターにおけるクロス分析結果を表5に示す。

性別をみると、四類型の中で主体的レクリエーション型、自発的貢献型では女性の占める割合が高い傾向にあり、一方、義務的参加型、他律対価型では男性が女性の割合を上回っている。

年齢では、主体的レクリエーション型の9割弱が10～20歳代が占めている。また義務的参加型では、他のクラスターに比べ年齢層の幅が広い傾向がみられる。また婚姻状況を

表5 . 各クラスターの個人的属性

項目	第1クラスター 自発的貢献	第2クラスター 他律対価	第3クラスター 主体的レク	第4クラスター 義務的参加
	----- % -----			
性別 ***				
男性	34.6(48.9)	54.1(34.5)	17.2(8.6)	63.6(8.0)
女性	65.4(55.1)	45.9(17.5)	82.8(24.7)	36.4(2.7)
年齢				
10歳代	43.1(55.8)	29.7(17.4)	54.0(24.7)	18.2(2.1)
20歳代	25.2(46.6)	32.4(27.1)	33.3(21.8)	27.3(4.5)
30歳代	11.4(47.5)	16.2(30.5)	8.0(11.9)	27.3(10.2)
40歳代	11.0(55.1)	15.3(34.7)	2.3(4.1)	13.6(6.1)
50歳代以上	9.3(65.7)	6.3(20.0)	2.3(5.7)	13.6(8.6)
婚姻状況 ***				
未婚	69.5(51.8)	64.0(21.5)	87.4(23.0)	54.5(3.6)
既婚	30.5(55.1)	36.0(29.4)	12.6(8.1)	45.5(7.4)
居住地				
県内	81.7(51.5)	91.9(26.2)	77.0(17.2)	90.9(5.1)
県外	18.3(59.2)	8.1(11.8)	23.0(26.3)	9.1(2.6)
職業				
生徒・学生	56.9(55.7)	39.4(17.6)	71.4(24.6)	22.7(2.0)
会社員	36.0(50.0)	49.5(31.4)	22.6(11.0)	59.1(7.6)
団体職員	2.5(54.5)	3.7(36.4)	1.2(9.1)	0.0(0.0)
公務員	0.8(16.7)	5.5(50.0)	1.2(8.3)	13.6(25.0)
主婦	3.8(60.0)	1.8(13.3)	3.6(20.0)	4.5(6.7)
その他	0.4(100)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
学歴				
中学校卒	32.5(65.6)	16.2(14.8)	24.1(17.2)	13.6(2.5)
高校卒	39.8(46.9)	55.0(29.2)	43.7(18.2)	54.5(5.7)
専門学校卒	2.4(54.5)	1.8(18.2)	3.4(18.2)	4.5(9.1)
短大・高専卒	9.8(53.3)	7.2(17.8)	12.6(24.4)	9.1(4.4)
4年制大学卒 (大学院修了含む)	15.4(48.7)	19.8(28.2)	16.1(17.9)	18.2(5.1)

*** p<0.001, 数値は縦に、また()内の数値は横にみる。

みても全体的に未婚の割合が高いが、特に主体的レクリエーション型が9割強が未婚で、一方、義務的参加型の既婚者の割合が4割強と高い。職業では、ボランティア型、主体的レクリエーション型では生徒・学生の占める割合が高いが、他律対価型、義務的参加型では会社員の占める割合が高い。

以上のことから、各クラスターの属性をみると、「主体的レクリエーション型」では、10、20歳代の若い年齢層の未婚の女性が多い傾向にある。また「義務的参加型」では、既婚の男性、会社員が多い傾向にあることが特徴としてみられた。

・まとめ

本研究では、ボランティア活動の大衆性からイベント・ボランティアへの参加動機に焦点をあて、その構造を探索的に明らかにし、多様化するボランティアの類型化を試みることを目的として、障害者スポーツイベントへのボランティア活動参加者を対象に質問紙調査を実施した。

その主な結果は以下の通りであった。

- (1) 学生(52.3%)を中心とした10・20歳代(69.3%)の若い年齢層の未婚(70.8%)の女性(62.7%)が多い。

- (2)参加動機項目を因子分析した結果、 ボランティア、 自己成長、 技術習得・発揮、 レクリエーション、 社会参加、 他律参加、 報酬、 参加者交流支援の8因子を抽出した。
- (3)参加動機項目の各サンプルごとの因子得点を算出し、 クラスタ分析により類型化を試みた結果、 4クラスターに分類され、 因子得点による解釈により、「自発的貢献型」(52.8%)、「他律対価型」(23.8%)、「主体的レクリエーション型」(18.7%)、「義務的参加型」(4.7%)に類型化された。
- (4)「主体的レクリエーション型」では、10・20歳代(82.8%)の若い年齢層の未婚(87.4%)の女性(87.3%)が多い傾向にある。また「義務的参加型」では、既婚(45.5%)の男性(63.6%)、会社員(59.1%)が多い傾向にあることが特徴としてみられた。

このようにスポーツイベントの活動に参加するボランティアは、愛他的なボランティア動機を主に多様な参加動機を有していることが明らかにされた。またこれらの参加動機によって4つのグループに類型化され、それぞれ特徴的な参加動機因子を示しており、参加動機によるボランティアの類型化の有用性が示唆されといえる。このことはボランティアの活動参加者の指向性の違いを明確にするもので、これらの類型をもとに活動の満足度や継続性との関連を明らかにすることが必要となろう。今後、イベントのボランティアに限らず、日常的活動との関係、活動領域の違いによる特性等、さらにボランティア活動参加者を様々な視点からアプローチしたより精緻な研究が望まれるところである。

・参考文献

- 1)小島廣光：非営利組織の経営 - 日本のボランティア - ，北海道大学図書刊行会，1998．
- 2)松本耕二：ボランティア活動への参加動機に関する研究 - 障害者スポーツイベントのボランティアに着目して - ，平成2年度鹿屋体育大学修士論文，1992．
- 3)前田博子・川西正志：スポーツボランティアの情報チャンネルに関する研究 - 1995 世界体操選手権鯖江大会について - ，兵庫県体育・スポーツ科学，6:19-28，1997．
- 4)総務庁：青少年とボランティア活動 - 「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書，pp.38-40，1993．
- 5)笹川スポーツ財団：スポーツボランティア，スポーツ白書，SSF 笹川スポーツ財団，pp.88-99，1996．
- 6)佐藤光邦：各種世論調査等におけるボランティア活動の現状，ボランティア白書 1995 年版，pp.156-180，社団法人日本青年奉仕協会，1995．
- 7)佐藤豊ら：スポーツボランティアの参加動機に関する研究 - 1995 年世界体操競技鯖江大会について - ，第47回日本体育学会体育社会学分科会発表論文集，pp.170-175，1996．
- 8)高野和良：「ボランティア社会」の可能性，月刊福祉，April，1996．
- 9)高見栄喜ら(1997)：スポーツボランティアの期待と満足に関する実証的研究，第48回日本体育学会体育社会学分科会発表論文集，pp.37-42，1997．
- 10)山口泰雄：生涯スポーツとイベントの社会学，創文企画，1996．
- 11)ボランティア白書編集委員会：ボランティア白書'96-'97，社団法人日本青年奉仕協会，1997．
- 12)CH ラブロック・CB ウェインバーグ：公共・非営利のマーケティング，pp.511-525，白桃書房，1991．
- 13)長ヶ原誠・山口泰雄ら：スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2) - ボランテ

- ィアの継続意欲の視点から - , 鹿屋体育大学研究紀要第 , 6号 , pp.69-75 , 1991 .
- 14)高見彰・山口泰雄ら：震災ボランティアの社会学的研究(1) - 性別による分析 - , レジャー・レクリエーション研究第 26 回大会発表論文集 , 34:90-93 , 1996 .
 - 15)世戸俊男・山口泰雄ら：震災ボランティアの社会学的研究(2) - 参加者タイプによる分析 - , レジャー・レクリエーション研究第 26 回大会発表論文集 , 34:94-97 , 1996 .
 - 16)野川春夫・菊池秀夫ら：地域活性化におけるスポーツイベントの総合的研究・調査報告書 , 鹿屋体育大学 , 1990 .
 - 17)総理府広報室：生涯学習とボランティア活動 , 月刊世論調査 26(5):53-101 , 1994 .
 - 18)KA.Henderson : Motivations and Selected Characteristics of Adult Volunteers in Extension 4-H Youth Programs in Minesota , National Recreation and Park Association Congress , 1979 .
 - 19)KA.Henderson : Motivations and Perceptions of Volunteerism as a Leisure Activity , J of Leisure Research , 13:208-218 , 1981 .
 - 20)KA.Henderson : Volunteerism as Leisure , J of Voluntary Action Research , 13(1) , 1984 .
 - 21)野上芳彦：ボランティア活動入門 , 白樹社 , 1974 .
 - 22)SSS 笹川スポーツ財団：スポーツライフ・データ 1998 - スポーツライフに関する調査報告書 - , 扇興社,1998 .
 - 23)杉本政治・高野和良：「ボランティア社会」構築の条件 - 社会福祉ボランティア活動を中心に - , NHK 放送文化調査研究年報 , 40:117-190 , 1995 .
 - 24)山口泰雄：ボランティア活動の広がり「スポーツを支える活動」の進行 , スポーツと健康 , 第一法規出版 , 30(6) , pp.23-25 , 1998 .